



日本語学習者の書き言葉における条件節の使用の実態調査 : 「JCK 作文コーパス」を用いて

安, 美彦

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 444:175-190

(Issue Date)

2021-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012581>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012581>



日本語学習者の書き言葉における条件節の使用の実態調査

—「JCK 作文コーパス」を用いて—

安 美彦

神戸大学(大学院生)

概要

本研究では、「JCK 作文コーパス」を用いて、4 つの条件節「と」、「たら」、「なら」、「ば」の頻度、使用環境と前接共起語の傾向性を明らかにする上で、日本語母語話者と比較しながら、書き言葉における中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者の条件節の使用実態の解明を目指す。その結果、(1)中国人学習者は条件節の全体の使用が多いこと;学習者の「たら」節の使用は母語話者より多いこと;特に韓国人学習者が「たら」節を多用すること;それに対して韓国人学習者の「ば」節の使用が少ないこと、(2)母語話者は使用環境による条件節の選好性が見られるが、学習者には同じ傾向性が見られないこと、(3)学習者の「ば」と「なら」に特徴づけられる前接共起語には母語話者と異なる傾向性が見られるが、これは母語の影響が考えられることが明らかになった。これらの結果は、日本語学習者に条件節指導を行う際、学習者の母語を配慮する必要があると示唆しており、また、より自然な使用のため各条件節を特徴づける使用環境も考慮しながら指導を行うことが重要であると示していると言える。

キーワード

条件節, 対照中間言語分析, 書き言葉, 学習者コーパス

1. はじめに

日本語学習者にとって習得が困難とされている項目の 1 つに「と」、「たら」、「なら」、「ば」を用いた条件表現がある(山下 1991; 益岡 1993; Johnson2000 など)。現代日本語における条件表現は、「順接」と「逆接」に分けられ、さらに「仮定的」、「事実的」の両方の用法を含め、多様な表現形式が存在する。それに加えてこれらには類義表現も存在するため、様々な文脈の中で、どの条件節が使用できるのか、或いは使用できる条件節が複数存在する場合どれが最も自然な形式なのかは明確ではなく、その選択は、日本語学習者にとって困難であると考えられる。以下は、作文コーパスにおける、学習者による条件節の誤用また不自然な使用例である。

- (1) もし金持ちたら(→だったら), 留学する, それも外国語がうまくなる方法の一つだ。
(中国人学習者・中級)
- (2) 長い時間勉強すれば(→すると) 嫌になる可能性がある。(中国人学習者・上級)
- (3) 蒸し鶏と言ったら, 韓国では安東と言うくらい有名です。(韓国人学習者・上級)
- (4) 鹿児島の名所と言えば, 桜島があります。(日本語母語話者)

上記の用例から, 中上級学習者であっても, 条件節を正しく使うことが必ずしも容易ではないこと, 文法的には間違っていないが, 作文という使用環境において丁寧さに欠けることが示された。

従来の研究では, 条件節の分類, 用法, 使い分けなどを中心とした研究が多くなされ, 学習者の使用実態に関する調査も見られる。しかし, 先行研究は大きく分けて, 少数の用例に対する分析が中心で, 大規模データベースを用いた計量的な研究が少ないこと, 学習者と母語話者の使用の比較はあるが, 学習者の母語が条件節の使用の問題に影響されているかを明らかにする実態調査は少ないこと, 個別条件節における学習者の実態調査に関する研究はあるが, 4つの条件節における全体的な使用傾向性を明らかにする研究は少ないこと, 文脈によるニュアンスの変化また, 各条件節の共起語の選好性について十分に議論されていないという制約が残されている。

一方, 最近ではコーパス言語学の分析手法が普及するようになり, これらの点を明らかにする分析アプローチの 1 つとして, 学習者コーパスを用いた L2 学習者の産出データを対象とする対照中間言語分析が広く用いられている。石川(2007)によると, Granger(1988)が提唱した「対照中間言語分析(Contrastive Interlanguage Analysis: CIA)」では, 学習者の L1 運用や目標言語の母語話者による運用と学習者の L2(中間言語)運用の相互比較(NL1 vs IL, NL2 vs IL)を加え, 異なる母語を持っている学習者の L2 運用の比較(IL vs IL)が行われる(なお, NL とは母語話者の言語使用, IL とは学習者による中間言語(interlanguage)使用を指す)。そこで, 母語話者と学習者の比較により, 中間言語の特徴を明らかにできる。例えば, ある単語の使用頻度の差を比較し, 母語話者よりも学習者のほうが多く産出していることが分かれば, 学習者はその単語の使用について不自然な使い方をしている可能性がある。また, CIA での学習者と学習者の比較により, 母語の異なる学習者の中間言語に何が共通するかを知ることができ, 母語影響の調査の際に用いられる比較パターンとして, それぞれの母語が異なることで, 中間言語で異なる特徴がある場合に, その原因の 1 つとして母語の影響を予測することができる。

以上を踏まえ, 本研究は CIA に基づき, 日本語作文コーパスの調査結果を根拠として, 母語話者および中国人・韓国人学習者間における「と」「たら」「なら」「ば」の 4 つの条件節の使用実態の分析を行おうとするものである。またコーパス調査の実施に当たっては, コーパスを 1 つの閉じたデータセットとみなすのではなく, それを構成するジャンルを区別して調査を行う。

2. 先行研究

これまでの先行研究は様々な角度や理論から, 母語話者また学習者における条件節の使用に

について多くの知見を示してきた。本節では、そのうち、「言語対照」と「学習者の使用実態」の 2 点に関わるものに限定して主要な研究を概観する。

日本語と諸言語との対照は、日本語の個別性と多言語との共通性を明るみに出すことによって、現代日本語の構造の研究、日本語教育などの言語教育にも寄与することが期待される(中川他 2006)。そこで、中国人・韓国人学習者の習得に参考になる日中対照と日韓対照の観点からの一部を挙げる。李・張(2012)では、日本語と中国語の条件文の期待性と反期待性を明らかにするため、＜前提条件・必須条件＞の立場から、日本語の「と」、「たら」、「ば」と中国語の「p, 就 q」と「p, 才 q」の対応関係について考察した。その結果、まず＜必須条件＞読みになる場合、日中両言語とも後件に反期待的内容が来ないが、＜前提条件＞読みになる場合はそのような制限はない。また、日本語では＜前提条件・必須条件＞の区別がはっきりしないものの、基本的に「と」・「たら」形式は＜前提条件＞読みの傾向が強く、「ば」形式は＜必須条件＞読みの傾向が強い。それに対して、中国語では＜前提条件＞表示文は「p, 就 q」、＜必須条件＞表示文は「p, 才 q」と形式的に異なっている。さらに、日中両言語の＜必須条件＞は可能文と「後件成立を目指す」といった点で論理構成が似ていて、「後件成立を目指しているから、それに必要な条件を求める違いない」といった「事態の成就への期待の存在」があると言える。そのため＜必須条件＞表示文が可能形式になっている場合がしばしばあるといった点で日中両言語は共通すると指摘された。鈴木・孫(2010)では、日本語の小説で使われている条件文の用例が韓国語ではどのように訳されているかを検討し、日本語と韓国語の条件文の比較を行った。日本語と韓国語の条件文の表現の仕方は基本的に共通性が高いが、韓国語の条件表現である「-면」類が広範囲かつ高頻度で、韓国語条件文の 8 割以上を占めていた。また「-면」は過去の一回の事実関係では、条件の意味用法よりも、時間関係、認識関係の意味が中心である一方、日本語の「ば」、「と」、「たら」は過去の一回の事実関係を表す用法がある点で「-면」とは大きく異なる。なお、「ば」と「と」は強い文末のモダリティ制限がある点、「と」は反事実条件文ではほとんど用いられない点で「-면」と異なると示した。

次に、学習者の条件節使用の実態調査を行った先行研究として、孟(2015)、張(2015)、斎藤他(2009)を見ていく。孟(2015)は KY コーパスの条件節「と」、「たら」用例に基づいて、条件節の全体の使用傾向を考察、比較した上で、中国人学習者の使用上の問題点を分析した。その結果として、中国人学習者の条件表現の使用には、(1)接続の間違い、(2)用法の誤用、(3)主節の動詞を省略する際の間違い、(4)文が長すぎ・適切な完結がない、(5)主節動詞の時制の混乱などの問題点があることが確認された。その原因としては、日本語と中国語における「条件表現」の範囲が違う、日本語の事実条件文の中国語訳文には無標形式が多い、教科書で指導する際、事実条件文のすべての用法は一度に導入される、日本語に対する認識はまだほとんどわからない状態での指導は詳しく、適切に説明していないなどの原因を示していると言える。また張(2015)では、中国人学習者の 377 篇の作文の条件節「と」の用例を用いて、動詞＋条件節「と」の前置き表現の観点から、母語話者と比較し、中国人学習者の習得状況を考察した。その結果、条件節の産出は「と」＞「ば」＞「たら」＞「なら」の順で、「と」節の過剰使用の傾向性が見られた。「見る・言う・考える・思う・比べ

る・よる」+「と」の組み合わせによる使用が多いが、学習者作文から見られたこれらの前置き表現の意味分類の考察を行ったところ、母語話者と学習者による「と」の前置き表現の産出に一致性が見られた一方、母語話者の「言う」と「と」についての「判断また評価の立場提示」の意味分類は学習者の産出がないと指摘した。斎藤他(2009)では、条件文「と」を日本語学習者は「仮定的領域」と「事実に領域」のどちらで理解しているかについて、中国人学習者と韓国人学習者の条件文(「と」、「たら」、「なら」、「ば」と理由文(理由「から」、判断「から」、前提「から」)の項目間の因果関係を重回帰分析の手法で調査し、「と」と他の項目との因果関係から日本語学習者の「と」の理解領域を分析した。結果としては、「と」が中国人学習者の場合は、事実に領域から、仮定的領域へと発達していく可能性を示唆し、韓国人学習者は仮定的領域から事実に領域へと発達させていく可能性を示唆した。それは、学習者は「と」の多義を同時に習得するのではなく、どちらの領域から理解し、拡張的に習得して行っているかによるものと考えられる。

以上のように、先行研究ではさまざまな角度や理論から、諸言語における条件節の「と」、「たら」、「なら」、「ば」の意味特性とそれらの言語を母語とする日本語学習者の使用実態の解明がなされた。しかし、前述したように、(1)大規模データベースを用いた計量的な研究が少ないこと、(2)学習者間の実態調査が少ないこと、(3)4つの条件節の使用における全体像を調査する研究が少ないこと、(4)条件節ごとの使用環境また、前接共起語の解明について十分に議論されていないという制約が残されている。

3. 研究設問・研究手法

3.1 研究設問

本研究では、「JCK 作文コーパス」を用いて、4つの条件節の頻度と使用環境、前接共起語の傾向性を明らかにし、日本語母語話者と比較しながら、書き言葉における中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者の条件節の使用実態の解明を目指す。以下 3 つのリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1: 4つの条件節の使用頻度という点において、中国人学習者、韓国人学習者、日本人母語話者間に違いがあるのか？

RQ2: 使用環境の傾向性という点において、中国人学習者、韓国人学習者、日本人母語話者間にどのような違いがあるのか？

RQ3: 前接共起語の使用傾向性という点において、中国人学習者、韓国人学習者、日本人母語話者間にどのような違いがあるのか？

3.2 データ

使用データは「JCK 作文コーパス」である。新城直樹氏(琉球大学)、庵功雄氏(一橋大学)、石黒圭氏(国語研究所)、金井勇人氏(埼玉大学)、末繁美和氏(岡山大学)、俵山雄司氏(名

古屋大学)によって 2015 年から 2019 年にかけて開発されたこのコーパスは、日本語能力試験 1 級相当以上のレベルを持つ中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に、2000 字以上の分量で書かれた日本語作文による学習者書き言葉コーパスである。ジャンルは説明文、意見文、歴史文(正確には時間の流れを意識した時系列文)の 3 種からなる。本コーパスは、他の類似の学習者コーパスに比べ、複数ジャンルを横断的に分析でき、あわせて、相対的に長い産出を分析できるという特徴を持つ。コーパス開発者の一員である石黒(2017)は、これらの特徴により、本コーパスを用いることで、学習者の「文章構造の意識やレジスターへの配慮」を調査できると述べている。コーパスの内部構造は以下の表にまとめられる。

表 1

「JCK 作文コーパス」の内部構造(石黒 2017)

ジャンル	説明文	意見文	歴史文
テーマ	自分の故郷について	晩婚化の原因とその展望について	自分の趣味について
要求	客観的な主張で、主観的にならないように書く。	説明ではなく、根拠とともに自分の主張を書く。	時間軸に沿って、ある出来事や経緯を書く。
日本語母語話者	20 本	20 本	20 本
中国人学習者者	20 本	20 本	20 本
韓国人学習者者	20 本	20 本	20 本

本研究では、母語話者と学習者のデータの比較を通して、学習者の条件節の使用が母語話者の基準からどの程度逸脱しているかを考察のアプローチとする。その点において、「JCK 作文コーパス」においては、執筆要求に関する統制が厳格に行われており、母語話者と学習者、また学習者と学習者間の差異を見るのに適していると考えられる。

3.3 対象とする条件節

日本語の条件表現は多様な表現を有し、「と」、「たら」、「なら」、「ば」の基本 4 形式が存在する。但し、これらは「ば」を接続させることで、「ならば」、「たらば」の形式も存在する。そこで本研究では、「と」、「たら」、「なら」、「ば」を対象条件節として分析を行い、「ならば」、「たらば」を分析対象外とする。その理由として以下 3 つのことが言える。

1 つ目は、多くの国語辞典においては「ならば」、「たらば」は独立項目として立項されておらず、「たら」、「なら」の添え書きとして記述されているからである。下記は 4 つの辞書における「なら(たら)」と「ならば(たらば)」の関係性を記述した一部であるが、どの辞書においても明確な記述がなされていない。

表 2

辞書による記述

辞書	たら	なら	たらば	ならば
明鏡国語辞典(2003)	未実現の事柄を仮定して、条件として示す。もし「かりに」 <u>...たらば</u> 。	後ろに述べることを導くための仮定的条件を表す。 <u>...ならば</u> 。事実ではないことを想定する。 <u>...ならば</u> 。	—	—
新明解国語辞典 第6版(2005)	「 <u>た(な)らば</u> 」の省略表現。	その事柄の実現を認め、または想定することを表す。	—	—
大辞林 第4版(2009)	接続助詞「ば」を伴わないで、それだけでも用いられる。完了の助動詞「た」仮定形。 <u>もしそう<u>な</u> <u>ったら</u></u> 。	断定の助動詞「だ」の仮定形。仮定形の「なら」は接続助詞「ば」を伴わないでそれだけで用いられることがある。	助動詞「た」の仮定形に接続助詞「ば」を付いたもの。 <u>もしそう <u>な</u> <u>ったら</u></u> 。	「それならば」の「それ」の略から。「 <u>それなら</u> 」に同じ。 <u>...なら</u> 。助動詞「だ」の仮定形に助詞「ば」の付いたもの。
言泉国語大辞典 第1版(1986)	活用語の連用形につける。完了の助動詞「た」の仮定形「 <u>たらば</u> 」の「ば」が脱落したもの。また「 <u>たらば</u> 」の転とも。「ば」の用法に通ずる。	(断定の助動詞「だ」の仮定形)接続助詞「ば」がついて「 <u>なら <u>ば</u></u> 」となることもある。	—	助動詞「だ」の仮定形に「ば」を伴ったもの。 <u>...なら</u> 。

2 つ目は、多くの先行研究中に「ならば」と「なら」には意味差がない(小林 1996)」とされているが、2 語の違いを指摘した研究結果もある(前田 2017)。そのため、「なら」、「ならば」と「ば」(「たら」も一緒)の関係性が不明であり、今後コーパスデータと統計的手法を用いて、日本語母語話者の使用実態を調査することで、「なら」と「ならば」についての関係性を明らかにする必要があると考えられるからである。

3 つ目は、安(2020)で日本語大規模コーパスを調べた結果、「たらば」、「ならば」の合計頻度が全条件節使用の 1.9%程度であるため、98%を占めている「と」、「たら」、「なら」、「ば」の調査を行うことで全体的な傾向を把握することができると考えられるからである。これら 3 つの理由により、本研

究では「ならば」、「たらば」を分析対象外とする。

また、「JCK 作文コーパス」から例文を抽出するとき、文字例で検索を行うため、「条件表現」以外のものを質的判断で排除する必要がある。従来の研究では、日本語における条件表現について表 3 の定義に基づいて分類されている。

表 3

条件表現の定義

	定義
前田(2007)	条件文が不確定な知識に基づく推論を明示する構文である。
高梨・山田(2008)	条件表現とは、2 つの事柄(前件と後件)の依存関係、すなわち後件が前件に依存して起こるという関係を表すものである。
小林(1996)	条件表現は、広く接続表現とされるもののうち、「て」や「つつ」などにより事態の単なる、時間的連続或いは並行的な現象として把握されるものを除き、前件と後件とか、何らかの因果関係を持って接続されるものをさす。いわゆる順接条件、逆接条件の両者、仮定条件、確定条件の両者と共に含む。

以上の説明から、いわゆる条件表現とは非常に幅広く、しかも定義と分類が曖昧な問題であると言える。即定条件、仮定条件もあれば、時間関係、前後関係を表す条件もある。また完了対未了、実際的対理論的、一般的対個別的(周 2009)など様々な角度から解釈されてきた。そこで、本研究では、先行研究が共通している「条件表現は前件と後件の因果関係を表すものである」という意味に基づいて判断を行う。また研究の一貫性を保つため、「例えば」(現代日本語書き言葉均衡コーパスでは 1 つの単語として「副詞」の品詞カテゴリーに分類されている)、「なければならない」(「必然」を表す慣用句)を分析対象外とする。

3.4 手法

まず、RQ1 では、母語話者と学習者、学習者と学習者の条件節の使用の頻度にどのような違いがあるかを解明するため、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者、日本語母語話者ごとの「と」、「たら」、「なら」、「ば」が含まれている条件文を抽出し、頻度を数える。全体の使用量を比較した後、各条件節の使用量を具体的に比較するため、母語により各条件節の使用頻度に違いがあるのかについては、一要因被験者内分散分析を行う。

つづいて、RQ2 では母語における条件節の使用環境傾向性を調査する。各ジャンル(意見文・説明文・歴史文)における 4 種の条件節の頻度を調査し、「母語＋条件節」を第 1 アイテム、「ジャンル」を第 2 アイテムとする頻度表に対して対応分析を行う。対応分析とは、石川他(2010)によると、頻度表における行・列の関係を組み替え、頻度表に含まれる多くのカテゴリーの情報を少数の成分にまとめることで、カテゴリー間の関係を散布図上に視覚的に出力する分析手法として、デー

タが視覚的に布置され、関係を直観的に解釈することが可能になると示す。

最後、RQ3 については、4 つの条件節と共起しやすい前接共起語について調べ、意味的特徴から議論を行う。4 つの条件節と直前に接続する共起語を手作業で抽出し、過去形、受け身型などの活用形を基本形にまとめる。なお、意味分析を行うため、直前に出現する 1 語に限定することよりも、その単語の接続要素も考慮しながら判断を行う。「ある」という単語を例として、「所属」を表す「...がある」と「存在」を表す「...にある」を区別する。そこで、「母語＋条件節」を第 1 アイテム、「上位共起語」(上位 30)を第 2 アイテムとする頻度表に対して、同じく行列データの相互関係を可視化する対応分析を実施する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 使用頻度

日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者による 4 種の条件節の頻度調査の結果は以下の通りである。

図 1

頻度調査結果

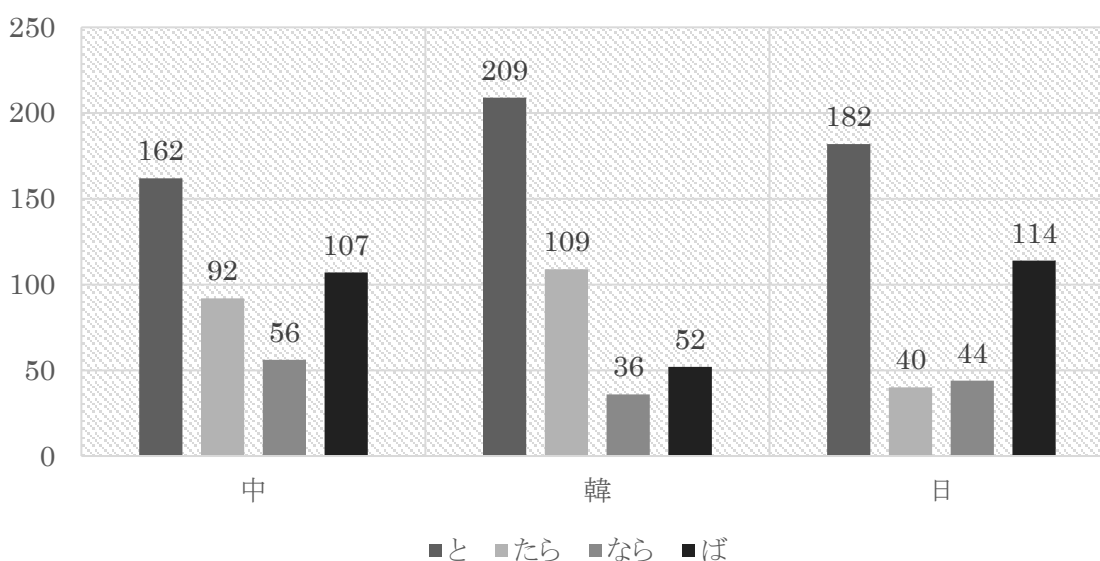


図 1 に示したように、4 つの条件節の使用について、母語別の違いが見られた。

まず、全体的な使用量を見ると、中国人学習者(417 例)＞韓国人学習者(406 例)＞日本人母語話者(380 例)という順序となる。日本語母語話者よりも、学習者の条件節全体使用量が多いことから、学習者の誤用また不適切な表現が含まれている可能性があると思定される。また学習者間でも、韓国人日本語学習者よりも中国人日本語学習者の使用が多いことが見られた。鈴木・孫(2010)は、日本語と韓国語の条件文の表現の仕方は基本的に共通性が高いと指摘したが、それ

に対して、李(2011)では中国語の条件文の分類は日本語の条件文の分類と大きく異なり、無標形式が多く存在すると述べられていることから、中国人より韓国人と日本人の全体使用に差が少ないものと考えられる。

また、条件節ごとの使用頻度に違いがあるかを明らかにするため、一要因分散分析を実施した。その結果、「と」、「なら」には母語の主効果に有意差が見られたが、「たら」、「ば」の使用には母語間の差が有意であった。まず、「たら」については、グラフにより、韓>中>日の順序が見られ、Holm 法の調整 p 値によると、中韓には有意差が見られなかったが、日中間、日韓間の差は有意であった [$F(2,177)=15.798$, $p<.005$, モデルの効果量 $\eta^2 p^2=.151$]。効果量によって、学習者と母語話者 2 群で分割でき、母語を問わず学習者の「たら」の使用が母語話者より多いことが明らかになった。ここで、学習者の「たら」節多用の理由を考えていく。まず「たら」は他の条件節より様々なモダリティを含む後接表現と生起可能で、自由・広範囲に使用される「条件節」として習得しやすいと考えられる。また、より話し言葉性が高く、日常会話でもよく使用されるため、学習者の作文作成に影響を及ぼすと考えられる。第 1 章で示したように、日本語母語話者は「作文」という書き言葉において話題提示には「言えば」の使用が多いが、学習者は「言ったら」の使用が多く見られる。なお、韓国人学習者が「たら」を多用する理由としては、2 つ考えられる。1 つ目は韓国語の中で最も汎用性が高い条件節の「...(으)면」は「モダリティ制約がない」、「自由に使用」、「軽い関係を示す」「会話・日常的」であるという点から、韓国人の「たら」の多用が想定できる。2 つ目としては、韓国語では、単語また活用形に「パッチム(받침)」の存在が多いため、韓国人学習者にとって「パッチム」と同じ「促音」がある「連用形－促音便＋たら」の方がより簡単に使用されると予測される。

表 4

韓国語に「パッチム」がよく見られる現象の例としての一部

単語に「促音」 の「パッチム」が ある	単語の活用形に「促音」の「パ ッチム」がつけられる(過去形を 例として)	条件を表す「...(으)면」「...더니」「...어야」 に接続する時にも「促音」の「パッチム」が つけられる
먹다(食べる)	가다(行く) → <u>갔</u> 다	가다(行く)→ 가면/ <u>갔</u> 으면
씻다(洗う)	하다(する) → <u>했</u> 다	가더니/ <u>갔</u> 더니
닫다(閉じる)	살다(生きる)→ <u>살</u> 았다	가야/ <u>갔</u> 어야
받다(受ける)		하다(する)→ 하면/ <u>했</u> 으면
듣다(聞く) ...		하더니/ <u>했</u> 더니
		해야/ <u>했</u> 어야
		살다(生きる)→ 살면/ <u>살</u> 았으면
		살더니/ <u>살</u> 았더니
		살아야/ <u>살</u> 았어야

それに対して、中国語には動詞自体の活用がなく、主に動詞原形の後に過去を表す「过」, 「了」, 或いは文中に条件を表す「只要, 就」, 「只有, 才」をつけられることとなる。

つづいて「ば」については、中 > 日 > 韓の順序が見られ母語の主効果が有意であった。Holm 法の調整 p 値によると、日中間には有意差は見られなかったが、日韓間、中韓間の差は有意であった [$F(2,177)=5.741$, $p<.005$, モデルの効果量 $\eta^2 p^2=.061$]。効果量によると、中国人日本語学習者、日本語母語話者と韓国人日本語学習者 2 群で分割された。そこで、まず韓国人学習者の「ば」の過少使用は、「たら」の過剰使用とも関わっていると考えられる。「たら」は意志的・感情的な突出度が最も高い条件節に対して、「ば」は因果関係を客観的に把握することで・話し手の主観や忒意が許されない(森田 1967)という点で大きな異なりがあり、「ば」が用いられやすい場合において「たら」を使いにくいと考えられることから、「たら」の過剰な使用傾向性が見られた韓国人学習者に「ば」の過少使用が予測される。

以上をふまえ、条件節の使用頻度という点において、母語話者の使用を基準として比較しながら学習者の使用実態を解明した結果、全体の使用量においては日韓より日中の差がより大きく、これは韓国語と日本語の条件文の表現の仕方は全般的な範囲・定義において中国語より共通性が高いのがその主な原因の 1 つであると考えられる。しかし、条件節ごとに比較してみると、韓国人日本語学習者の使用頻度のずれが中国人日本語学習者より大きかった。これは、中韓両言語における条件表現の内部構造と関わっていると考えられる。

表 5

中国語と韓国語条件表現の内部構造(奈良 2006・李 2011 の一部)

前件＋後件	韓国語の条件表現	中国語の条件表現
事実＋反事実	-	既然, 那么
反事実＋反事実	면; 어야	要不是, 就
未実現＋未実現	면; 거든; 어야	如果, 就
事実＋未実現	면	既然, 就
不問＋不問	면	只要, 就; 只有, 才
事実＋事実	면	只要, 就; 只有, 才
非条件	면; 거든	一, 就; 正在, 时

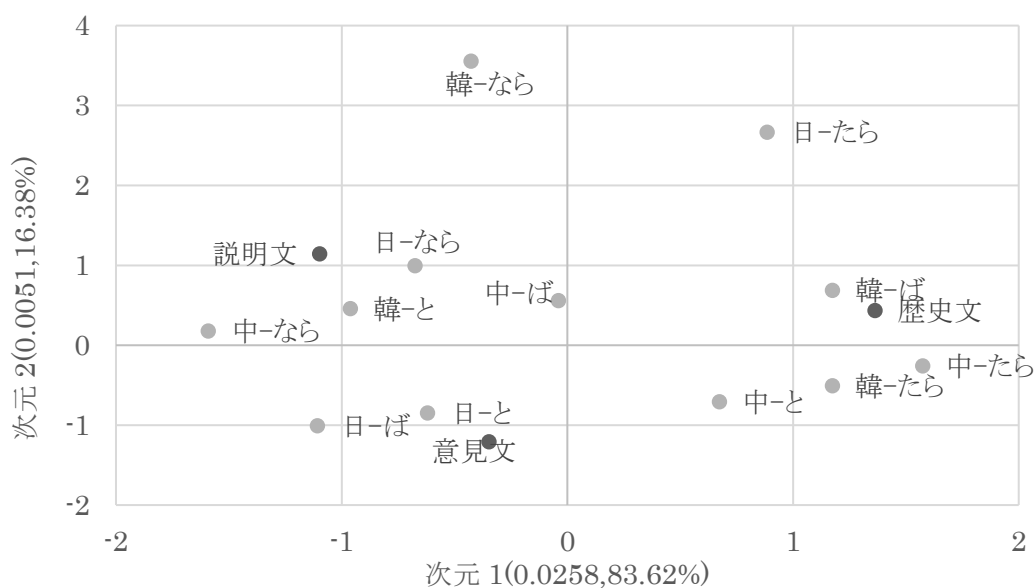
上記の表から、中国語には「 p , 就 q 」, 「 p , 才 q 」など条件表現には基本形式が多く存在するという点で日本語と同じパターンが見られ、またある程度対応できる項目も見られる。一方、韓国語の条件表現の内部構造には「... (으)면」で網羅することで、より詳しい意味分類の違いがないことから、具体的な条件節における韓国人学習者の過剰・過少使用が考えられる。

4.2 RQ2 使用環境

3 種の作文ジャンル別に日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者が使用した条件節の頻度を調査して、ジャンルにおける傾向を見るため、第 1 アイテムを「母語＋条件節」、第 2 アイテムを「ジャンルと」する対応分析を行った結果、以下の散布図が得られた。

図 2

アイテム散布図(条件節とジャンルの関係)



第 1 軸の寄与率は 83.62%，第 2 軸の寄与率は 16.38%で、高い説明力が得られた。散布図を見ると、日本語母語話者には条件節の使用とジャンルにはっきりとした傾向性が見られた。意見文には「と」、説明文には「なら」、歴史文には「たら」の使用が特徴づけられることが見られるが、一方学習者の使用はジャンル別に分類されていなかった。

そこで、まず各ジャンルの文体特徴と母語話者の使用について考察していきたい。「晩婚化の原因とその展望について」に関して書かれた意見文は、主に晩婚の現状・理由、またそれに対する書き手の主張と今後の予測・対策の内容である。条件節(特に「ば」)の使用で前件の内容に対して控えめに条件を提示したり、意見を述べたりする例文がよく見られる。

- (5) 逆に、こういった制度をさらに整備しなければ、働いている女性は結婚しづらいままであり、ますます晩婚化が進むであろう。(j01-2)
- (6) いまでは恋愛を通過点とすれば結婚をゴールとするようなあり方がほとんどでしょう。(j05-2)

まず、母語話者の「ば」と「と」の使用について考えていく。現状や一般常識を述べながら、ただの主観的判断だけではなく、より説得力を持つ妥当な判断を加えて読み手に訴えることで、読み手

の考えを喚起しようとしていることが分かる。「ば」を使用することで、前件と後件の事態が緊密な因果関係・必然関係となり、後件の事態が予測されやすいような前件の事態を仮定することになる。より予測されやすいことで、読み手の考えをより喚起しやすい上に、意見文ではより高い説得力が得られると考えられる。また、母語話者の意見文には「と」が特徴づけられることも明らかになった。

- (7) 従来は、人が結婚適齢期になると、周りがその人に合いそうな異性を斡旋することが多々ありました。(j21-2)
- (8) 年金制度が崩壊すると、収入にたいする不安から、ますます結婚に踏み切れずに晩婚化が進むのである。(j01-2)

先行研究では、「と」は他の 3 つの形式と異なるという指摘が多く、有田(1999)では、「と」は英語の「and」と同様、並立・継起的関係を表すもので、派生的に条件的意味を持つものとみなしている。そこで、晩婚化が進んでいる理由や背景について、前件で示す事柄を、後件では関連する他の観点から拡張して(或いはきっかけとして)捉えることにより、畳み掛けるような議論となっていることが見られる。

次は、「なら」が説明文に特徴づけられることについて考えていきたい。自分の故郷に関する説明文では、主に書き手の出身地の名所を紹介する文章が書かれている。「なら」は「一般的な主題用法」「提題の用法を持っている」(蓮沼 2001)ため、説明文では無生物主語を頻繁に用いて描写することで、読み手への話題を提示し、情報を詳しく述べる傾向性があると考えられる。学習者にも同じ選択パターンが見られた。

- (9) 墨田区にあるスカイツリーなら電車で 15 分で行けますし、江東区内の移動がスムーズなのは言わずもがな、新宿・渋谷・池袋など主要な駅へも 30 分程度で着きます。(j04-1)
- (10) 北の町なら冬が一番いい季節と思います。(c14-1)
- (11) 地下鉄を乗り換えするなら、どこで乗ったほうが乗り換え時間を質約することが出来るかなどの情報まですぐ分かるようになってより便利に利用できるようになりました。(k15-1)

最後に、歴史文には「たら」の使用が特徴づけられ、このジャンルに関する「時間の流れを意識した時系列文」と「書き手が積極的に自身の存在を示そうとしている」(石黒 2017)との点が関わっていると考えられる。益岡(1993b)では、「たら」と「ば」を比較しながら、「ば」は前件と後件の関係を、時間を超えて成り立つ一般的な条件として表現しているが、「たら」は時空間に実現する個別的事態として表しおり、より現実世界における経験的な事態に接近していると指摘した。個別的・経験的になるほど、「たら」を使えるようになり、「歴史文」が「意見文」より現実的・個別的事態に言及するという点が明らかになった。

- (12) 結局、京都大学への興味は失ってしまったのだが、旅行が楽しかった記憶だけは鮮明に残っていた自分は大学に入学したら一人旅に明け暮れようと決心した。(j08-3)
- (13) 一度経験したらきっとその魅力がわかると思う。(j15-3)
- (14) もし地震が来たら、食料と iPod を持って逃げたい。(j18-3)

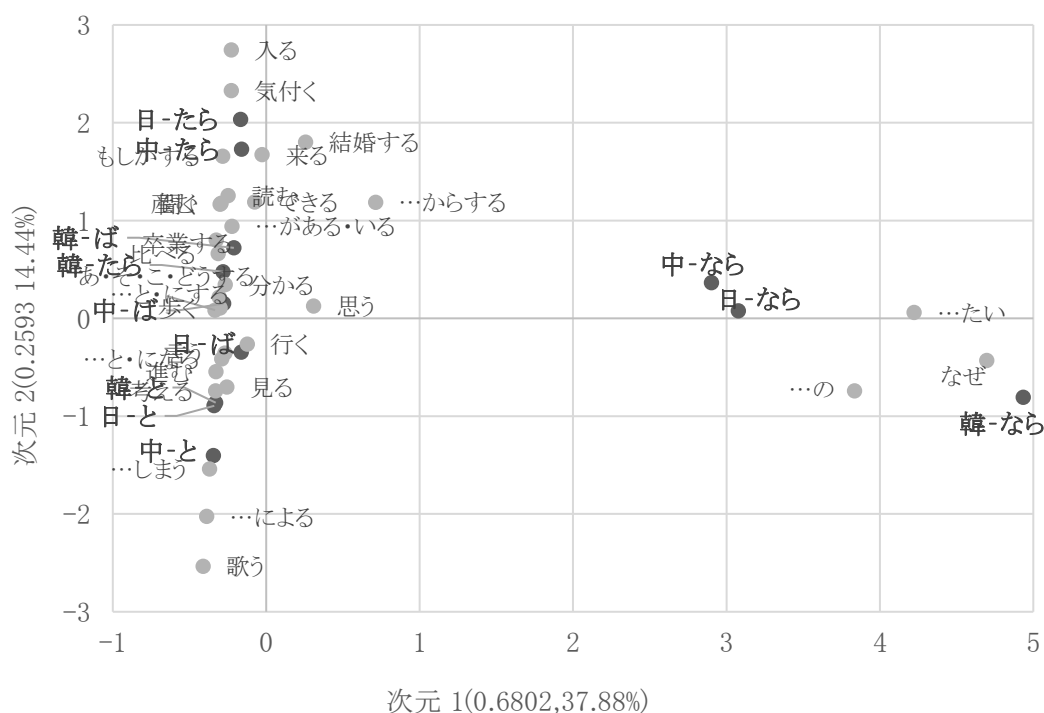
以上は母語話者のジャンルによる異なる条件節の使用実態についての分析であるが、それに対して学習者のジャンル間には使用の偏りがあり見られない。そこで、分析の 2 つの軸において、次元 1 の寄与率が高く、横軸上の位置が最も重要な分類観点になっているという点をふまえてデータを観察すると、韓国人日本語学習者の「ば」の使用と中国人日本語学習者の「と」の使用が母語話者と相対的に大きな違いがあると言える。その理由としては、学習者は「ば」と「と」は緊密な因果関係でより必然性が高い点についてよく理解できず、「たら」使用と混同されると考えられるからである。

4.3 RQ3 前接共起語

ここでは、4 つの条件節の使用について、母語による様々な共起の仕方に違いがないのかを検証した。4 つの条件節のいずれかと高頻度共起語の上位 30 項目を対象として対応分析を行ったところ以下の散布図が得られた。

図 3

アイテム散布図(条件節と前接共起語の関係)



次元 1 と次元 2 の寄与率はそれぞれ 37.88% と 14.44% で、全体の半分以上が説明できる。前接共起語との観点から見ると、ジャンルの観点と異なり、ほぼ「条件節」で揃えている。しかし、その中でも、韓国人学習者の「なら」の使用は母語話者とずれていること、また母語話者の「ば」と「と」は共起傾向性で同じ象限に属しているが、中韓学習者による「ば」の使用が母語話者と違いがあることが観察された。

まず、韓国人学習者の「なら」節の使用については、「なぜ」との共起性が高いことが見られた理由としては、母語との関連があるためではないかと考えられる。日本語の「なぜなら」は疑問を表す「なぜ」と条件節「なら」との組み合わせであり、原因を提示理由で表す接続詞として、後文は「なぜ」という疑問に対する理由を補足するものである。韓国語の「왜냐하면」も二つの文章が原因と結果の関係のときに内容をつなぐ役割があり、疑問を表す「왜」＋条件節「-면」で原因を提示する点で日本語の「なぜなら」と共通している。それに対して、中国語の「因为，原因是」と英語の「since, for」はただ 1 つに単語で原因提示することに大きな違いがある。

次に、母語話者の「ば」と「と」の使用がある程度一致していることに対して、学習者の使用には母語問わず「ば」と「たら」に同じ傾向性が見られた。日本語の代表的な仮定的条件形式である「ば」は、「法則的な依存関係」(益岡・田窪 1992)、「一般的な因果関係」(益岡 1993a)、「必然的な帰結」(国研 1981)、「ものごとの道理を表す言い方で使うのが典型」(益岡 1993b)などとされ、予測条件を表す典型的な形式と言える(金 2018)。そこで、予測条件とは、話し手が後件事態に最も一般的・法則的・必然的につながる前件の事態、すなわち、前件の事態が緊密な因果関係にあると認識し、後件が予測されやすいような前件を仮定するものである(金 2018)。また辞書による「と:あることが前接条件となって必ず次のことが起こるという関係を表す」(『明鏡』2003)、「と:前件が前提となってほとんど例外無く後件が行われることを表す」(新明解 2005)の記述から、「ば」・「と」両方とも予測性が高く、個人より社会的な必然性を表すことが考えられる。一方、「たら」については、先行研究では「前件で時空間の中に実現する個別的な事態を表し、後件での実現に依存して成立する別の個別的事態を導入する、個別的事態の依存関係」(益岡 1993b)を表すものと定義する。つまり、「たら」は意志的・感情的な突出度より高く、個人的・主観的な意味特徴を持っていることから、「と」・「ば」と大きな違いがあると考えられる。以下に、代表性を持つ前接共起語が使用されたコーパスの用例を示す。

- (15) 女性の社会進出が進むと、女性にとって選択肢が増えます。(j21-2)
- (16) これから晩婚化が進めば、ますますその傾向は強められる。(j07-2)
- (17) 大学生活は高校の時と比べたら、余裕はあったものの高校の時とはまた違う大変さがあつたんです。(k16-3)
- (18) 大都市に比べれば、静かなので個人的にはこんな環境が本当に好きです。(k06-1)

以上のことから、書き言葉における学習者の「たら」の過剰使用と「ば」の不適切な使用が想定さ

れる。その原因としては、「ば」の論理性・必然性が高いこと、「たら」の使用範囲が広いものの、個人的・主観的で、書き言葉という環境で丁寧さがずれていることが認識されていないことが考えられる。

5. まとめ

本研究では、「JCK 作文コーパス」を用いて、日本語母語話者の比較しながら、書き言葉における中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者の条件節の使用実態を解明した。以下、本研究で明らかになった知見を整理して示しておく。

まず、RQ1 の使用頻度について、(1)全体的な使用量は中＞韓＞日という順序関係となること、(2)「と」、「なら」には母語による使用頻度差がないこと、(3)学習者(特に韓国人学習者)は「たら」を多用すること、(4)韓国人学習者は「ば」を過少使用する傾向性があること、が確認された。

次に、RQ2 の使用環境について、(1)日本語母語話者の使用には条件節ごとに特徴づけられるジャンルが見られたが、学習者のジャンル間には使用の偏りがないこと、(2)母語話者の意見文には「ば」・「と」、説明文には「なら」、歴史文には「たら」を使用する傾向性が見られること、(3)韓国人日本語学習者の「ば」、中国人日本語学習者の「と」の使用が母語話者と相対的に大きな違いがあることが確認された。

最後に、RQ3 の前接共起語については、(1)母語話者と学習者の使用に大きな差がないこと、(2)韓国人学習者の「なら」節の使用は「なぜ」と共起性が高いこと、(3)母語話者の「ば」と「と」の使用がある程度一致していることに対して、学習者の使用には母語問わず「ば」と「たら」に同じ傾向性があることから、書き言葉における学習者の「たら」の過剰使用と「ば」の不適切な使用が想定されることが確認された。

もっとも、本研究には制約も残されている。1 点目は、分析対象を 4 つの条件節に限定して、「たらば」と「ならば」を対象外としたことである。今後は「たらば」と「ならば」と 4 つの基本形式の関係性を明らかにした上で、対象範囲を広げ、条件を表す接続詞の全体像を調査する必要があると考えられる。2 点目は、前接部分に注目して調査を行ったが、後続表現・モダリティ制約について調査を行っていないことである。多くの先行研究から、4 つの条件節に異なる呼応表現を持っていることが指摘されたが、この点について学習者による使用傾向に関する分析が行われていないため、学習者の違いを細かく調査する必要がある。3 点目は、母語という点に注目して、他の要素について詳しく分析を行っていないことである。石川(2010)では、L2 学習者が言語産出を行う際には影響する要因が多数に及ぶことをふまえ、学習者のデータを多角的な観点から分類した上で、比較することの重要性を主張しており、そのような分析アプローチを多層的対照中間言語分析と呼んでいる。上記に示されるように、限られた L2 学習者間での比較を行うだけではなく、L2 産出に影響を及ぼすと考えられる要因を組み合わせた統合的な分析を行う必要がある。今後、これらの課題の対応を目指し、研究を深めていきたい。

引用文献

- 石川慎一郎(2008)『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』くろしお出版.
- 石川慎一郎(2015)「The ICNALE: 国際中間言語対照分析のための新たな学習者コーパスの開発」『電子情報通信学会技術研究報告』115(361), 13-18.
- 石黒圭(2017)『わかりやすく書ける作文シラバス』ひつじ書房.
- 金智賢(2018)『現代日本語と韓国語における条件表現の対照研究』ひつじ書房.
- 鈴木義和・孫哲(2010)「日本語と韓国語の条件文の対照研究」『国文論叢』(神戸大学文学部国語国文学会) 43, 31-52.
- ソルヴァンハリー(2006)「日本語学習者における条件文習得問題について」益岡隆志(編)『条件表現の対照』(pp. 173-193) くろしお出版.
- 田中寛(2005)「条件文と条件表現の体系的研究: 序章」『大東文化大学紀要』43, 277-304.
- 張桂麗(2015)「中国人日本語学習者による「と」の前置き表現」『応用言語学研究論集』8, 47-60.
- 日本語記述文法研究会(2009)『日本語文法記述 6』くろしお出版.
- 前田直子(1998)「バ, ト, タラ, ナラ — 仮定条件を表す形式 —」『日本語類義表現の文法下』くろしお出版.
- 前田直子(2006)「条件表現研究の導入」『条件表現の対照』くろしお出版.
- 益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』くろしお出版.
- 孟慧(2015)「中国語母語話者の日本語の事実条件文の習得について」『専修国文』(専修大学日本語日本文学文化学会) 97, 103-128.
- 李光赫(2011)『日中対照から見る条件表現の諸相』風詠社.
- 李光赫・張建偉(2012)「必須条件を表す条件表現における日中対照: 中国語の“(只有)p, 才q”との対照を中心に」『国語学研究』(国語学研究刊行会) 51, 38-49.